

## 佳作

今こそ輝け「ヤクーバとライオン」

高橋 宏

柳田先生、私は三十七年間にわたって教職に励み、中学生に国語を教えて参りました。言葉の大切さを丁寧に伝え合い、お互いの気持ちを深く理解することで、人類は進歩を勝ち取ったと自信を持って教えて参りました。

そんな私ですが、最近の風潮には大きな違和感と危惧を抱いております。その理由を先生にお伝えし、改めて絵本『ヤクーバとライオン』に励まされ、生きる勇気と希望にしていること、そして、この絵本の生命力を今こそ輝かせたいと念じ、手紙に認めさせていただくことといたしました。

最近、人間同士のコミュニケーションツールは、進化の一途をたどっています。スマホが登場し、刻一刻と情報が更新され、近しい人とは寸暇を惜しんでラインでやりとりしています。これまでに考えられないスピード感で、コミュニケーションが深化しているような錯覚に襲われます。

なぜ錯覚と表現したのか、それは便利さが進む一方で、人間同士の相互理解や許容範囲の幅は日増しに狭まっているとも感じているからです。

その事例を挙げ始めると、限りなく連鎖します。親子間・兄弟間の感情の暴発による殺人、少年集団によるリンチ致死事件、障害者施設における無差別殺傷事件…

こうした個人の引き起こした事件の背景には、現代社会が抱える深刻な病巣が見え隠れしていま

す。

芸能人をはじめとする、何か問題を起こした者に対する異様なまでのバッシング… 虚実織り交ぜて、これでもかとはばかり、容赦なく責め立てます。ヘイトスピーチ、米国における人種差別の復活、果ては難民差別や国際テロに至るまで、強者による弱者たたきや弱者による怒りや悲しみの爆発に、この世界は満ちあふれています。

確かに文明は進歩しているのですが、「人類は歴史を逆流して退歩しているのでは…」という、暗い妄想に心が支配されそうになると私は、柳田先生の翻訳された『ヤクーバとライオン』の絵本を読み返しています。

村の勇者を目指す少年ヤクーバは、出会ったライオンに、こう語りかけられます。

「見てのとおり、わしはきずついている。夜どおし手ごわい敵とたたかかって、力もつきはてた。おまえがわしをしとめるのは、たやすいことだろう。」

「おまえには、二つの道がある。わしを殺せば、りっぱな男になったと言われるだろう。それは、ほんとうのめいよなのか。もうひとつの道は、殺さないことだ。そうすれば、おまえはほんとうに気高い心をもった人間になれる…」

殺さない道 を選んだヤクーバは戦士にはなれませんでした。ライオンとの深い信頼関係とお互いへの尊敬の念を生かし、村を救います。この選択が、深い意味をにじませて、今を生きる私の胸に迫ります。

国同士であれ、組織同士であれ、個人同士であ

れ、相手より強い力を誇示することで平和が維持されるという神話から、私たち人類はもう脱却する必要があるので、この作品は教えてくれます。し、結びの言葉といたします。

弱者を力でねじ伏せた上に築かれた均衡状態では、お互いに信頼することはできず、尊敬の気持ちかわいてくることもありません。そのことだけは、次世代に受け継ぐことのできる生き方を貫きます。

情報伝達の手軽さや速さを尊重する社会よりも、慎重に考えることや相手への思いやりを大切にする社会を広げるため、私も『ヤクーバとライオン』の読み聞かせを、これからのライフワークの一つにいたします。

子どもたちの心に染み渡る絵本を与えることが、私を違和感や危惧から救ってくれる道だと信じ、また今日もよい絵本を探します。